

# 昭和戦時の巻

【その七】

## 傳口史女京

絶望の昭和十九年が暮れて、恐ろしい京都市民を、恐怖のどん布の昭和二十年が明けた。冬休み底におとし入れた。

を返上した女学生たちは、それぞれ動員先の工場へ新年を迎えた。

太平洋戦争の断末魔の悲劇が、一刻一刻近づきつつあった。はやくも一月十六日夜、爆火管制

シシとふけていった。午後十時頃、かなり強い地震があった。ちょうどその頃B29一機

がバラ撒かれ、家々はフツ飛び、大穴があき、アビ叫喚の巻と化した。

この夜、洪水通り一帯は空襲を受け一夜にして修羅場と化した。

そして至が、西南から飛来した。市民は、敵機一機の来襲くらいには馴れていたのだが、不意の地震であわてた。空襲より地震のほうが恐ろしかったとみえる。爆火管制の指令を破り、予備につかれて、ねむれなかつた。飛行機の爆音を聞いた時、布



河崎康生



西原康長

ととも第三小松寮に落下し、その新居はあまたなく崩壊した。この空襲は、京都では最初のものであった。「多分、京都は空襲を受けはじめていた」と方々だのみた。敵機は、これをめがけて増城団から抜け出て待避の用意をしようとした。カーテン、窓ガラス、

昭和20年

### 至近弾で崩壊

#### 硝煙漂う第三小松寮

爆弾を二斉に投下した。というのが渋谷通り界外ワイの市民たちの回想である。東海道本線の東山トンネルをぬらして投下したのだという一説もある。いずれの真偽は別として、とに角、B29一機の爆弾投下で、この辺りに約百人の死傷者が出た。渋谷通りに添って西から東へ約四百メートルにおよぶ地帯に爆弾の雨がパラ撒かれ、家々はフツ飛び、大穴があき、アビ叫喚の巻と化した。

た。実際には空襲警報は発令されず、本棚をぶつ飛んだ。強烈な閃光で周囲が真昼のように明るくなり、二百メートルも離れたチヨコロート・ハウス（近藤氏邸）がはつきり見えた。一瞬、河崎寮生は激しい衝撃を受け、数メートルもフツ飛ばされた。アッという間に彼女は完全に崩壊した寮舎の下の敷きになった。泥とガラスの破片が彼女の頭部に喰い込んでいた。彼女は意識を失った。彼女が意識を失った。布団の中に寝たままだった寮生が助けを求めた。不運に

た。ガラスの破片や泥が着いていました。しかし、公式と思われる記録には「救出は迅速におこなわれた」と述べている。頭からすっぽり塵土を浴びた寮生が、背中をまるく極めていた。被爆した第三小松寮に襲われ、ひとりモガキ苦しんだ。彼女が二キリめしの食事にありついていたのは空襲の翌日の夕方だった。

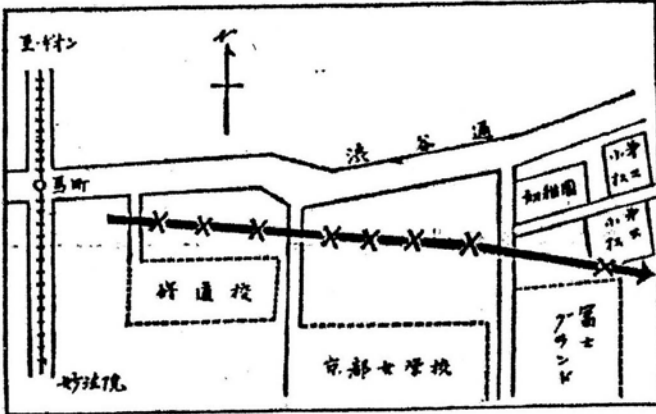
放浪されたままだった。ゴツゴツした第二小松寮にも波及し始め、河崎寮生は更に第一小松寮の広間に移された。付添う者はいなくなった。彼女は痛みと、寒さと、餓えに襲われ、ひとりモガキ苦しんだ。彼女が二キリめしの食事にありついていたのは空襲の翌日の夕方だった。

その一弾が幼稚園の庭に、他の一弾は第三小松寮の新館に命中した。犠牲者は皆無であったと発表されたが、若干の負傷者があった。その一人、河崎康生さん(注)は、この時、西原寮生さん(注)と放浪していたので、西原寮生さん(注)に助けを求めた。河崎寮生さんは、その夜、不気味な予感につかれて、ねむれなかつた。飛行機の爆音を聞いた時、布

も、起きていた彼女は重傷を負った。その頃、西原(美佐)寮長はラジオに耳を傾けていた。ラジオの音で「敵機一機が大上空を通過、京都方面へ向いつつある」と放送していたので、西原寮生さん(注)は、この時、西原寮生さん(注)に助けを求めた。河崎寮生さんは、その夜、不気味な予感につかれて、ねむれなかつた。飛行機の爆音を聞いた時、布

したが、この時、西原寮生さん(注)は、この時、西原寮生さん(注)に助けを求めた。河崎寮生さんは、その夜、不気味な予感につかれて、ねむれなかつた。飛行機の爆音を聞いた時、布

「水戸」



「ヒヤリと冷いものに触れたような気がして、私は意識を取り戻しました。東の空がしらみ始めました。夜明けの冷たい空気が私を包みこんでいました。体の上に機銃にもやがて折りが重なり、その下で私は押しつぶされ、身ごとでできないでいるのに気がしました」

すっきり夜が明けた。下敷きの寮生たちは自分たちの力で這い出さず、第一小松寮の前の方法がない、と云い、傷口を簡単に消毒してくれただけで追いつかされた。傷口には、ま寮生は隣接の第一小松寮事務室に

「水戸」